

イブン・タイミーヤ『書簡・提題論集』より聖者関連論考 解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖*

1. 解題

1) 中期における聖者信仰への批判

前回までの2回にわたって、古典期におけるスーフィズムの聖者論を紹介してきた。今回は、少し時代を下らせて、聖者信仰がさかんとなった中期(12世紀中頃から17世紀終わりまで)に書かれた、聖者信仰批判の論攷を取り上げたい。

スーフィズムばかりでなく、イスラームにおいては広く、聖者および彼らの奇蹟が信じられてきた¹⁾。彼らへの信仰が人々のあいだに広まるにつけ、これをイスラームの正しい信仰に反するとみなして非難する人々も現れてきた。

そこで主として論点となったのは、聖者信仰の際に見られる諸々の儀礼であった。それらは、しばしば非イスラーム的なものとして批判された。たとえば、聖者に対して神へのとりなしを求めること(tawassul, istighātha)や、聖者廟参詣の際にしばしば行われる願掛け(nadhr)などに対して、スンナからの逸脱であるといった批判がなされてきた。ただし、聖者の存在や、奇蹟の存在そのものが問題とされることは、前近代においては基本的になかったことに注意したい。近代になって初めて、西洋教育を受けたモダニストたちが、奇蹟を反科学的な迷信として批判するようになるのである。

本稿でとりあげるのは、しばしばスーフィズムに対する最大の批判者だと言われるイブン・タイミーヤによる、スーフィズムの聖者説に対する批判である。彼がスーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象²⁾の一部(たとえばイブン・アラビーの教説やタリーカの一部の儀礼など)を激しく論難することは確かだし、同時代のスーフィーたちを快く思っていなかったことは間違いがないが、スーフィズムそのものには反対していなかったと考えられる[東長 2013: 190-203]。さらに進んで、彼自身がカーディリー教団に属するスーフィーであったとする研究もある[Makdisi 1973: 118-129; Makdisi 1979: 115-126]。

イブン・タイミーヤのスーフィズムに対する態度について、トルコの研究者ムスタファ・カラは次のように記述する[Kara 1999: 413-414]。彼は、スーフィズムのズフド(禁欲)、アフラク(倫理)といった側面を受け入れ、初期のスーフィーたちに対しては肯定的に心を寄せていた。フダイル・イブン・イヤードやイブン・アドハムといった初期のスーフィーには敬意を払っており³⁾、スンナ派の枠内にあるとイブン・タイミーヤが考えるジュナイドらについては認めていた。また、スラミー、クシャイリー、マッキー、ガザーリーらによるスーフィズム古典期マニュアルに対しては、是々非々の態度で臨んだ。初期のスーフィーではただハッラージュを批判したのみであるとカラは述べる⁴⁾。ハッラージュが唱えたとされるフルール(受肉)説をはじめ、イッティハード(合

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

1) イスラーム思想における聖者論の諸相については、[東長 2013: 174-187] 参照。

2) 「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」については、[東長 2013: 21, 74-75] 参照。

3) 「初期のスーフィー」という表現は、カラによる。通常は、スーフィズムに先行する禁欲主義の人々と考えられることが多い。

4) 実際には、後述の「イッティハード」説を唱えたバスターミーをも批判する。

一)、ワフダ・アル＝ウジュード(存在一性論)といった、論争を呼ぶ形で表現される観方に対しては、厳しい批判を向けた、としている。

フランスの研究者アンリ・ラウストは、イブン・タイミーヤがスーフィズムの著作を広範に読んでいたことを述べる。たとえば、トゥスタリー、ジュナイドなど初期のスーフィーや、古典マニュアルの著者クシャイリー、マッキー、カーディリー教団の祖アブドゥルカーディル・ジーラーニー、スフラワルディー教団の祖アブー・ハフス・スフラワルディーらの著作を読んでおり、イブン・アラビーの著『マッカ啓示』も若い頃読み、影響を受けたとしている[Laoust 1971: 953]。

総じていえば、イブン・タイミーヤはスーフィズムの全体を否定してはいない。よくスーフィズムの著作を読み、自らの信念に照らして正しいものは賞賛し、誤っているものは批判している。本稿はその内、聖者説について批判した部分の紹介である。

2) イブン・タイミーヤの生涯について

彼は著名なハンバル学派の法学者・神学者で、名前はタキユッディーン・アフマド・イブン・タイミーヤ。661年ラビーウ・アウワル月10日/1263年1月22日にハッラーンで生まれ、728年ズー・アル＝カアダ月22日/1328年9月26日にダマスカスで没した。有名な人物なので、その生涯の説明は『岩波イスラーム辞典』、*Encyclopaedia of Islam*などに譲ることにし、ここではスーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象と関わりのある事柄だけにしぼって述べる。

通常、イブン・タイミーヤの「スーフィズム」批判とされているものは、イブン・アラビーらの思想(神秘主義哲学)をめぐるもの、タリーカ(教団)をめぐるもの、聖者廟参詣をめぐるもの、という3つの側面をもっている⁵⁾。

第1の側面については、まず703/1304年ラマダーン月に、イブン・タイミーヤはイブン・アラビーの著『叡智の台座』(*Fuṣūṣ al-ḥikam*)を読み、これを論駁する書 *al-Nuṣūṣ 'alā al-Fuṣūṣ* を著し、ついで704/1304-5年には、イブン・アラビーの思想を鼓吹していたカリームッディーン・アームリー(Karīm al-Dīn al-Āmulī, d. 710/1310-1)とナスル・マンビジー(Naṣr al-Manbijī, d. 719/1319-20)にイブン・アラビー批判の書翰を送った。

707/1308年シャウワール月にはイブン・アラビー批判に関してイブン・アター・アッラー(Ibn 'Atā' Allāh, d. 709/1309)と論争をおこなった。この論争でイブン・アター・アッラーはイブン・タイミーヤの誤りを何ら実証できなかったとされるが、この後イブン・タイミーヤは拘禁されることとなった。

第2の側面であるタリーカ批判については、705/1305-6年ジュマダー・ウーラー月にはダマスカスのアフマディー＝リファイー教団のスーフィーたちが鉄の首輪をし、火くぐりや蛇をのむなどの奇行をしていることを批判したことが知られている。アフマディー＝リファイー教団のスーフィーたちはダマスカスの代官(nā'ib al-saltāna)に訴え出たが、結局イブン・タイミーヤの主張が容れられて、鉄の首輪の着用は禁じられ、クルアーンとスンナに反した者は首を打つとして決着を見ている。

第3の側面である聖者廟参詣批判については、彼の書いた『墓参詣』(*Ziyāra al-qubūr*⁶⁾)という論文が元で、726/1326年シャアバーン月に逮捕されている。審査は開かれることがなく、マムルーク朝スルタンのマリク・ナースィルの名の下、ウマイヤ・モスクで言い渡された判決によって、

5) 神秘主義哲学とタリーカをめぐる批判については、[東長 2013: 190-203]ですでに取り上げている。典拠や文中の人物の詳細についてはそれを参考のこと。

6) 当該論文は、Ibn Taymīya, *Majmū'a al-rasā'il* に所収。

ファトワーを出す権利を奪われた [Ibn Kathīr 1990: 123; Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī 1972: 174; al-Maqrīzī 1971: 273; Laoust 1971: 953]。

3) イブン・タイミーヤの著作について

イブン・タイミーヤはその生涯において数多くの本を残した。彼の著した論文・本については、直弟子のイブン・カイイム・ジャウズィーヤが、『シャイフ・アル＝イスラーム・イブン・タイミーヤ著作名』(*Asmā' mu'allafāt Shaykh al-Islām Ibn Taymīya*) でリスト化している [Ibn Qayyim al-Jawzīya 1983 (1403)]。ここには、タフスィール関係 92 点、神学 (uṣūl) 関係 20 点、信仰の基礎 (qawā'id)・ファトワー関係 145 点、法学関係 55 点、遺戒 (waṣāyā) 関係 3 点、免許状 (ijāzāt) 関係 4 点、その他 22 点の合計 341 点の著作が挙げられている⁷⁾。

彼の著作は、その大半が出版されており、著作集も何度か刊行されている。代表的な著作集としては、*Majmū'a al-rasā'il*, al-Qāhira, 1906 (1323); *Majmū'a al-rasā'il al-kubrā*, al-Qāhira, 2vols., 1906 (1326); *Kitāb majmū'a al-fatāwā*, al-Qāhira, 1908–11 (1326–9); *Majmū'a fatāwā Shaykh al-Islām Aḥmad Ibn Taymīya*, 30 vols., Riyāḍ, 1961–4 (1381–3); *Majmū'a al-rasā'il wa al-masā'il*, 5 vols. in 2, Bayrūt, 1983 (1403) などが挙げられる。

4) 『書簡・提題論集』について⁸⁾

本書には、30 点ほどの論攷が収められているが、本稿の趣旨に鑑み、ここではスーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象に関わる論攷に焦点をしばって紹介する。

このトピックについては、第 1 部に集中的に論じられているが、第 4 部にも論攷がひとつある。第 5 部の論攷は、複合現象を主題とはしていないが、そのなかに若干複合現象に言及する箇所を含んでいる。

第 1 部には、(1) *Ahl al-ṣuffa wa abā'il ba'd al-mutaṣawwifa fī-him wa fī al-awliyā' wa aṣnāfi-him wa al-da'āwī fī-him*, (2) *Ibtāl waḥda al-wujūd*, (3) *Munāzara Ibn Taymīya al-'alanīya li-dajājila al-baṭā'ihīya al-Rifā'iya*, (4) *Libās al-futūwa wa al-khirqa 'inda al-mutaṣawwifa*, (5) *al-Fatā wa al-futūwa wa al-za'im wa al-ḥizb wa al-daskara wa mā qālū-hu fī-him*, (6) *Mimma khuliqa al-nabī ṣallā Allāh 'alay-hi wa sallama wa bi-ma tatafāḍalu al-makhlūqāt*, (7) *Kitāb Shaykh al-Islām ilā al-'arīf al-Shaykh Naṣr al-Manbijī* が、第 4 部には (8) *Risāla Shaykh al-Islām ilā man sa'ala-hu 'an ḥaqīqa Madhhab al-ittiḥādīyīn ay al-qā'ilīn bi-waḥda al-wujūd*, 第 5 部には、(9) *Qā'ida fī al-mu'jizāt wa al-karāmāt wa anwā' khawāriq al-'ādāt*, (10) *Risāla al-'ibādāt al-shar'iya* が収められている。

(1) は、スーフィーたちの説く聖者説の誤りを説くもので、本稿はこの論攷の一部の翻訳である。(2) と (7), (8) は、存在一性論の誤りを糾弾するもの。この内 (7) は、生涯の項で紹介した、704/1304-5 年にナスル・マンビジーに送ったイブン・アラビー批判の書翰である。(3) は、アフマディー＝リファイー教団の慣行に対する批判であり、これについても生涯の項で説明しておいた。(4), (5) は、しばしばスーフィズムとの関連で語られるフトゥワをめぐる慣行等を批判したものである。(6) の論攷のなかには、スーフィーの行うサマーウについての言及がある。(9) は、奇蹟についての論攷であり、法学・ハディース学・スーフィズムなどに言及するが、複合現象を批判

7) 本書は著作名を列挙するのみで、内容に関する説明は一切ない。

8) 本書の内容紹介にあたっては、底本によった。ほかに、底本の第 4 部・第 5 部の論攷を中心とした Ibn Taymīya, *'Arsh al-Rahmān wa mā warada fī-hi min al-āyāt wa al-aḥādīth, wa yalī-hi Majmū'a al-rasā'il wa al-masā'il*, al-Riyāḍ: Maṭābi' al-Nashr al-'Arabī, 1999 も刊行されている。この本の書名で冒頭に出されている *'Arsh al-Rahmān* は、底本では第 4 部に収められており、*Majmū'a al-rasā'il wa al-masā'il* の一部である。

するための論攷ではない。(10)も、複合現象に特化した論攷ではないが、なかにスーフィズムやタリーカの誤りに言及する箇所を含んでいる。

【解題への参考文献】

- Ibn Hajar al-‘Asqalānī. 1972. *al-Durar al-kāmina fī a ‘yān al-mi’a al-thāmina*, Ḥaydarābād al-Dakan: Maṭba‘a al-‘Uthmāniya, Majlis Dā’ira al-Ma‘ārif.
- Ibn Kathīr. 1990. *al-Bidāya wa al-nihāya*, vol.13, Bayrūt: Maktaba al-Ma‘ārif.
- Ibn Qayyim al-Jawzīya. 1983(1403). *Asmā’ mu’allaqāt Shaykh al-Islām Ibn Taymīya*, Bayrūt: Dār al-Kitāb al-Jadīd.
- Kara, M. 1999. “Tasavvuf İlgili Görüşleri,” in s.v. F. Koca, M. S. Özbervarlı & M. Kara, “İbn Teymiyye, Takıyyüddin,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, vol. 20, pp. 413–414.
- Laoust, H. 1971. s.v. “Ibn Taymiyya,” *EF*, vol. 3.
- Makdisi, G. 1973. “Ibn Taimiya: A Sufi of the Qadiriya Order,” *American Journal of Arabic Studies*, 1, pp. 118–129.
- . 1979. “The Hanbali School and Sufism,” *Boletín de la asociación española de orientistas*, 15, pp. 115–126.
- al-Maqrīzī. 1971. *Kitāb al-sulūk li ma ‘rifā duwal al-mulūk*, ed. by Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda, vol. 2, part 1, al-Qāhira: Maṭba‘a Lajna al-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr.
- 東長靖 2013 『イスラームとスーフィズム－神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会。

2. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、Ibn Taymīya, *Majmū‘a al-rasā’il wa al-masā’il*, Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiya, 1983 (1403), vol. 1, pp. 48–51 を底本として使用した。

訳文中で「(アッラーの) 友」「ワリー」と訳されているものが、いわゆる「聖者」を指している。

この「聖者の奇蹟」章も、前稿同様、2007年度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した(敬称略、所属は当時)。横内吾郎、篠田知暁、山口隆史、関谷匡史、高垣ひとみ(以上文学研究科)、佐治奈通子、庄田亜由美(以上文学部)、丸山大介、安田慎(以上アジア・アフリカ地域研究研究科)。これら学生諸君から貴重な意見・示唆を与えられることが少なくなかった。

翻訳

/48/ 聖者(awliya’)に関するスーフィーたち(al-mutaṣawwifa)⁹⁾の嘘。

節。「朝な夕な、主の慈顔を求めてかれに祈る者と共にあなた自身を堅く守りなさい(wa-ṣbir)。」(Q 18:28)という[アッラー]のお言葉については、それ[この章句¹⁰⁾]は、夜明け前や午後の礼

9) スーフィーのグループ。mutanabbī(似非預言者)、mutafalsifa(似非哲学者)のように、5形の能動分詞は、「似非～」の意味になることが多いので、「似非スーフィー」の意味である可能性もある。ただし、mutaṣawwifaは多くの場合、ṣūfiyaと同義に用いられる。

10) wa hiya. ここのhiyaは前掲のクルアーンの章句(al-āya)を指していると思われる。

拝を集団で行う者たちのように、この描写が含む者について一般的に「言われるもの」である。なぜなら彼らは、ベンチの人々(ahl al-ṣuffa)¹¹⁾であれ、それ以外の人々であれ、「朝な夕な、主の慈顔を求めてかれに祈る」からである。アッラーはその預言者に、「主の慈顔を求め」つつ正しい(al-ṣāliḥīn)アッラーの僕たちと共に耐えること(ṣabr)を、/49/として「現世の生活の栄華を望んで」(Q 18:28)彼らからその両目を逸らさないように(lā ta'dū 'aynā-h 'an-hum)¹²⁾と、お命じになった。これは洞窟についての節であり、これはマッカ[啓示の]章である。また、「主の御喜びを求めて、朝夕、かれに祈る者を追放してはならない。かれらの(善悪の)精算は、少しもあなたの任ではなく、あなたの精算は、少しもかれらの任ではない。それで、あなたがかれらを追放するならば、あなたは不義の徒となるであろう。」(Q 6:52)という家畜章の中にある節も同様[にマッカ啓示]である。

これら2つの章句は、弱った信仰者たちについて、おごり高ぶった者たちが預言者に対し彼らを遠ざけるように求めた際に、下ったと伝えられる。そして至高なるアッラーは、たとえそれが弱い者であろうが、彼[主]の「慈顔を求め」る者を見捨てることを禁じ、それから彼らと共に耐えることをお命じになったのである。それは、マッカへの聖遷以前、[マディーナにおける預言者ムハンマドの家の]ベンチの存在以前のことであったが、ベンチの人々もそうでない人々も、この描写の含むあらゆる者にこれは届いたのである。

これによって意図されるところは、たとえ貧しく、弱い者たちであろうとも、畏れ信じる人々——それこそアッラーの友たち(awliyā' Allāh)であるが——と共に[預言者ムハンマド]がいたということである。至高なるアッラーの御許では何びとも力(sultān)や財産(māl)において[誰かほかの人に]先んじることはないし、卑しさ(dhull)や貧困(faqr)においても[先んじることは]ないのである。ただ[アッラー]の御許では、信仰と正しい行いによってのみ先んじるのである。それゆえ至高なるアッラー——彼に讃えあれ——は、弱い者、貧しい者を[ムハンマドが]遠ざけることを望んだ、指導権(ri'āsa)や財産(māl)¹³⁾の持ち主が従われることを禁じ¹⁴⁾、彼[ムハンマド]に彼ら[弱い者、貧しい者]の内、彼[アッラー]の「慈顔を求め」る者を遠ざけないように、また夜明け前や午後の礼拝のように彼らと近く集うことを[アッラーが]命じた集団の中で「彼らと共に自らを堅く守る(耐える)」ように、またアッラーの御名を唱えることを忘れる者たち、自らの欲望に従う者たちの命令に従わないように、命じたもうたのである。

聖者(awliyā')に関するスーフィーたちの嘘。

節。「集団において人々が一致するのはただ、その中にアッラーにとっての友(walī li-Allāh)がいる場合のみである。」という流布しているハディースについていえば、それは嘘の一つであり、イスラームの根本台帳(dawāwīn)の中にはない¹⁵⁾。どうして、[ムスリムの]集団が、それ[こういう謬説]をもったまま死ぬ(yamūtūna 'alā dhālika)異教徒(kuffār)で迷える者たち(fussāq)であるなどと

11) マディーナの預言者ムハンマドの家の中庭に置かれたベンチのところに住み着いていた人々。マディーナ出身でない移住者(muḥājirūn)で、住むところもなかった人々で、着たりきりすずめの人々も多かった。代表的な人物に、アブー・フライラ、アブー・ザッル、ビラール、サルマーンなどがある。ムハンマドの傍近くに住えた人々として、後代尊崇の対象になり、しばしばスーフィーの起源と考えられるようになった。

12) Q 18:28の章句に基づいている。クルアーンには、「朝な夕な、……守りなさい。また現世の生活の栄華を望んで、かれらからあなたの目をそらせてはならない。」とある。

13) ここの「指導権」と「財産」は、上述の「力」と「財産」に対応している。政治的権力と経済的な力の謂いである。

14) この部分は本文が乱れていると思われる。校訂本の脚注は、「アッラーは預言者に、……持ち主に従うことを禁じた。」というのが本来あるべき原文であろうとしている。

15) 根本聖典にない、より具体的には信じるべきハディース集成の中に記載がない、の意か。

いうことがあろうか¹⁶⁾。

/50/ 節。至高なるアッラーの友たち (awliyā' Allāh) は、アッラーが彼の本[クルアーン]の中で述べておられるように、信仰心を持ち、畏れを持つものたちである。彼らは、中庸を行く右手の所有者と、先を行くお傍近く仕える者の2グループである。そしてアッラーの友はアッラーの敵の反対である。至高なるアッラーは言われた。「見なさい。アッラーの友 (awliyā' Allāh) には本当に恐れもなく、憂いもないであろう。(Q 10:62)」また至高なるアッラーは言われた。「真にあなたがたの(真の)友 (walīy-kum) は、アッラーとその使徒、ならびに信仰する者たちで——中略¹⁷⁾——アッラーとその使徒と信仰する者たちを友として助ける者は、アッラーの一党で、必ず勝利を得るものたちである。(Q 5:55-56)」また至高なるアッラーは言われた。「われ敵 ('adūwī) であり、またあなたがたの敵 ('adūw-kum) であるものを、友 (awliyā') としてはならない。(Q 60:1)」また至高なるアッラーは言われた。「その日、アッラーの敵 (a'dā' Allāh) は集められ、火獄への列に連なる。(Q 41:19)」また至高なるアッラーは言われた。「それなのにあなたがたはわれを差し置いて、かれとその子孫を保護者 (awliyā') とするのか。かれらはあなたがたにとり敵ではないか。(Q 18:50)」

ブハーリーはその[ハディースの編著である]『真正集』において、アブー・フライラ——アッラーが彼を嘉したまわんことを——から語り伝えて曰く、「アッラーの使徒——アッラーがかれに恩寵と平安をもたらしたまわんことを——が曰く、至高なるアッラーが言われるには、『私にとっての友 (walī) に敵対する者は、私に闘いを挑む者である。私の僕である信仰者の魂を取り上げること (qabḍ) は私も躊躇するが、[それ以外であれば] 私が行為者である物事を躊躇することはない。私は[僕]に辛く当たることを厭うが、[死]が彼には不可避なのにもかかわらず、彼は死を厭うのである。私の僕は、私が彼に課した義務の遂行のようなものでは私に近づくことは[でき]ない。余徳の行 (nawāfil) によって[のみ]私に絶えず近づき、とうとう私が彼を愛するまでになるのだ。そして私が彼を愛する時には、私はそれでもって聴くための彼の耳となり、それでもって見るための彼の眼となり、それでもって打つための彼の手になり、それでもって歩くための彼の足となるのだ。そうして、私でもって彼は聴き、私でもって彼は見、私でもって彼は打ち、私でもって彼は歩むのである¹⁸⁾。』

ワリーと、アッラーにとってのワリー性についての説明。

ワリー (walī) は、ウィリー (wīlī) から来ており、それは「近さ」(qurb) [という意味]である。それはちょうど、敵 ('adūw) がウドゥー ('udūw) から来ており、それは「遠さ」(bu'd) [という意味]であると同様である。それゆえ、アッラーのワリーとは、その愛するもの (maḥbūbāt-h)、満悦するもの (mardiyāt-h) において[アッラー]と一致することによって[アッラー]に近い者であり、[アッラー]が彼に命じた[アッラーへ]の服従行為[である善行]によって、[アッラー]に近づく。預言者——彼にアッラーが恩寵と平安を垂れたまわんことを——は、この真正ハディースの中で2種類を述べられた。中庸を行く右手の所有者たち (al-muqtaṣidūn aṣḥāb al-yamīn) ——彼らは至高なるアッラーに、義務行為によって近づく者たちである——と、先を行くお傍近く仕える

16) この部分、原文は wa kayfa wa al-jamā'a qad takūn... とあるが、wa kayfa al-jamā'a... として訳した。

17) クルアーンの原文「礼拝の務めを守り、定め喜びをなし、謙虚に額づくものたちである」が省略されている。

18) ブハーリー「人生における恵み」章38節。ただし、現行の刊本とはいくつかの文言の相違がある。ちなみに、このハディースの後半部は、余徳の行のハディース (ḥadīth al-nawāfil) として、スーフイズムでしばしば引用されるもの。

者たち (al-sābiqūn al-muqarrabūn) ——彼らは義務行為の後の余徳の行によって近づく者たちである—— [の2種類] である。アッラーは彼らに、[クルアーンの] 創造者章 (35 章¹⁹⁾)、出来事章 (56 章²⁰⁾)、人間章 (76 章²¹⁾)、/51/ 量を減らす者章 (83 章²²⁾) で言及された。[これらの諸章は]、傍近く仕える者たちがそれを飲むことを [これらのクルアーンの諸章の中で] 述べられている飲み物は、右手の所有者たちにとっては混ぜ [て与え] られる²³⁾、と伝えた。そして、完璧なるワリー (al-walī al-muṭṭlaq) とは、そのまま死ぬ者である。そうであってみれば、もし信仰 (al-īmān) と畏れ (al-taqwā) が彼に植え付けられ、彼がそれから背くことが至高なるアッラーの知の中にあるとするなら、[この人物は] [元来の] 信仰と畏れの状態においてアッラーの友であるのだろうか？ それとも、アッラーが彼の導きの結果²⁴⁾ を知っておられるがゆえに、けっしてワリーではないと言われるのであろうか？ ウラマーには [この] 2つの説が [両方とも] ある。

同様に、彼らによれば、不信仰が後に続く信仰²⁵⁾ は、[まずは] 正しい信仰 (īmān ṣaḥīḥ) であり、それから、その [いったん] 完全性の [状態に入った] 後で、誤った諸行為 (mā yaḥbiṭ min al-a'māl) [をしてしまうといったこと] のレベルにおいて誤ったものになる (yaḥṭul) ののであろうか？ それとも、断食において日没より前に断食を破ってしまう者や礼拝において平安 [を唱える]²⁶⁾ より前に何か悪いことをした (aḥḍatha) 者のレベルにおいて [最初から] 誤った信仰なのであろうか²⁷⁾？ これについては、法学者、神学者、スーフィー²⁸⁾ に2つの説があり、それに関して、スンナとハディースの徒であるイマーム・アフマド [・イブン・ハンバル] の支持者たちとそれ以外の人々の間で論争がある。

19) Q 35:32 には「その後、われはしもべの中から選んだ者に、この經典を継がせた。だがかれらの中には、自ら魂を誤った者も、中間の道をとる者 (muqtaṣid. 本文に「中庸を行く」者と訳した者) もあった。またかれらの中のある者は、アッラーのお許しのもとに、率先して種々の善行に勤しむ者 (sābiq bi-al-khayrat. sābiq の部分が、本文に「先を行く」者と訳した者) もあった。それは偉大なみ恵みである。」とある。ここ本文と関係の深い部分に下線を引いておいた。以下同様。

20) Q 56:7-12 には「その時あなたがたは、3つの組に分けられる。まず右手の仲間 (aṣḥāb al-maymana) (がいる)。右手の仲間とは何であろう。また左手の仲間 (がいる)。左手の仲間とは何であろう。(信仰の) 先頭に立つ者 (al-sābiqūn) は、(樂園においても) 先頭に立ち、これらのもの (先頭に立つ者) は、(アッラーの) 側近にはべり (al-muqarrabūn)、至福の樂園の中に(住む)。」とある。下線は引かなかったが、「右手の仲間」もこの本文の記述と関係があるだろう。また、Q 56:27 には「右手の仲間 (aṣḥāb al-yamīn)、左手の仲間とは何であろう。」とある。Q 56:38 には「(これら [樂園の乙女引用者注一] は 右手の仲間 (aṣḥāb al-yamīn) のためである。)」とある。また、Q 56:88-91 には「もしかが、(アッラー) に近づけられた者 (al-muqarrabūn) であるなら、(かれに対する報奨は) 安心と満悦、そして至福の樂園である。もしかが、右手の仲間 (aṣḥāb al-yamīn) であるならば、「あなたに平安あれ。」と右手の仲間から (挨拶される)。」

21) 76 章には、本文中に登場する4つの語は現れないが、全編、人間を信心者と不信心者に分けて論じており、この内信心者に関する記述を指しているのであろう。次の記述との関連でいえば、15-17 節の「銀の水差しとガラスの杯は、かれらの間に回されよう。ガラス (の杯と見えたの) は銀で造られていて、かれらは好みの量をそれに満たす。かれらはそこで、生姜を混ぜた杯の飲み物を与えられよう。」がとくに関係深いと思われる。

22) Q 83:21-28 には「(主の) 側近者たち (al-muqarrabūn) が、それ [20 節に出る「完全に書かれた一つの記録」を指す一引用者注一] を立証する。本当に敬虔な者は、必ず至福の中におり、かれらは寢床に寄って、見渡すであろう。あなたはかれらの顔に至福の輝きを認めよう。かれらは、封印された純良な酒を注がれる。その封印はジャコウである。これを求め熱望する者に熱望させなさい。それにはタスニーム [天にある一つの泉の名であり、純良の酒よりも優れたアッラーの側近者のための甘露のような飲み物を指す] が混ぜられよう。一つの泉から側近者 (al-muqarrabūn) たちはそれを飲もう。」とある。

23) タバリーの Q 83:27 への註釈によれば、傍近く仕える者たちはタスニームをそのまま飲ませてもらえるが、右手の所有者たちはそのまま飲ませてもらえず、混ぜ物をした状態で飲ませてもらうのだという。

24) アッラーが信仰と畏れを植え付けて正しく導こうとしたにもかかわらず、途中でそれに背いてしまうこと。

25) 最初は信仰を持っていたが、後にそれを捨てて不信仰者になることを指す。

26) 礼拝の最後に左右を見て、「あなた方に平安とアッラーの慈悲がありますように。」と2回繰り返すこと。つまり、ここは礼拝が終わる前に、という意味。

27) ここで2つのレベルが対比されているが、前者は最初は正しかったのに後に誤ってしまうという人のレベルであり、後者は最初から誤っている者のレベルである。

28) al-fuqahā' al-mutakallimīn wa al-ṣūfiyya. 法学者かつ神学者とスーフィーが対比されているのか、神学者かつ法学者とスーフィーかつ法学者が対比されているのか、もしくは法学者、神学者、スーフィーが同一レベルで論じられているのかのいずれかであろうが、決することはできなかった。

同様に、これについては、マーリク〔・イブン・アナス〕およびシャーフィイーの徒とそれ以外の人々の間に論争がある。しかしながら、マーリクとシャーフィイーの徒の多くが結果の健全さ〔途中で信仰に背くことなく最終的に信仰者として死ぬこと〕を条件としたのに対して、アブー・ハニーファの徒の大多数が結果の健全さを条件としない。それ〔結果の健全さを条件としないこと〕はアシュアリーのようハディースの徒の神学者たちの多くおよびシーア派の神学者たちの説で〔も〕ある。この論争に基づいて、アッラーの友がアッラーの敵になる〔ことがある〕か、またその逆は〔如何、という問いが出てくる。〕また、アッラーが愛でられ、嘉したもうた人を、ある時に〔なって〕〔アッラーが〕お憎みになり、お怒りになるだろうか。またその逆に、アッラーがお憎みになり、お怒りになった者を、ある時に〔なって〕〔アッラーが〕愛でられ、嘉したもうだろうか、〔という問いも出てくるが、これらの問いは上述の〕2つの説から来るのである。

真相は両説の統合である。なぜなら、過去において永遠なアッラーの知とそれに続く〔アッラー〕の愛・ご満悦 (ridā)・嫌悪・怒り・ワリーであること・敵であること〔といったことの両方〕は変化しないのである。そして、〔ある人間〕の死に際して〔アッラーが〕信仰と畏れをお与えになるということはアッラーの彼についての知から来ており、アッラーの愛や友であることやご満悦は、未来においても過去においても永遠に (azalan wa abadan) 彼に付随しているのである。